

加藤政洋 著  
『酒場の京都学』

ミネルヴァ書房 2020年1月 232頁  
2,500円＋税

日常のそこかしこに、自分が好むあれこれにも、いや、むしろそういう所にこそ、時空を超えた探究を可能にする題材が存在すると実感できるのは、歴史地理学の醍醐味の一つである。だから、「酒場が好きです」という一文から始まる本書は、そこからどんな世界が広がるのかを期待させるに十分である。著者のこれまでの研究、つまり「盛り場」を切り口とした都市史研究の厚みと魅力<sup>1)</sup>を知っている人ならば、評者があらためて言うまでもなく、さらなる期待と共に本書を手にとらずにはいられないだろう。

まず、酒場から京都がどのように論じられているのか、その見取り図として、以下に目次を提示し、内容に触れつつ本書の意義を述べ、最後に若干の課題を提示して評としたい。

#### 序章 裏町の酒場から

- 1 宣伝酒場のなごり／2 空間を足して割って／3 裏町の風景／4 本書の構成

#### 第1章 〈茶屋酒〉の系譜学

- 1 「夜毎に変わる枕の数々」／2 名所における酒食の光景／3 明治期の「酒場」／4 酒場の系譜

#### 第2章 酒場の誕生

- 1 学生文化と飲食店／2 三高生の酒場／3 社会問題化するカフェー／4 昭和京都の飲み歩き

#### 第3章 洋食酒場と花街

- 1 三高生と女給／2 四条通のカフェー／3 明治京都の西洋料理屋／4 古川ロップの「色町洋食」論／5 花街と〈場所の力〉

#### 第4章 歓楽街の誕生

- 1 歓楽街とはなにか／2 「風俗営業」の取り締まりと歓楽街／3 歓楽街の分布／4 裏町「歓楽街」の成立／5 変わりゆく花街／6 「歓楽街」成立の地理的基盤

#### 第5章 《裏寺町》の空間文化誌

- 1 「ぼんや」をめぐる語り／2 東西〈都〉の酒場風景／3 《裏寺町》の正宗ホール／4 戦後《裏寺町》の風景

#### 終章 〈会館〉という迷宮

1 集合建築としての〈会館〉／2 〈会館〉の出現とひろがり／3 都市の無意識

それでは早速、酒場の暖簾をくぐり、その世界に飛び込んでみよう。

まず序章「裏町の酒場から」では、京都屈指の繁華街「四条河原町」の店にはいる。店内をぐるり見渡す描写から、読者はそこが蔵を模した造りであることや、伏見の酒蔵で醸造されていた酒の銘柄を想起させる文字を目にとめることができる。著者によれば、こうした酒の銘柄を看板に掲げた店は「宣伝酒場」と称されるらしい。品書きの短冊に見え隠れする銘柄の文字を確認するあたり、ただ飲んでいるだけではない地理学者の観察眼が光る。

続いて、店の名前が変わり看板を掛けかえた後も、それまでと同じ樽酒を供していたことが、住宅地図とタウンページの広告を突き合わせて証明される。記録に残りやすい店の名前や建物の位置から一步踏み込んで、そこで何がどのように飲み食いされていたのかまでは知る由もない、と思いがちだ。地理学に限らず、これまで様々な学問分野において「飲食」にじっくり向き合った研究が少なかったのはそのためである。しかし、資料の突き合わせや観察の工夫によって、時空を超えてその喧騒の中に飛び込むことは実は不可能ではない。本書のそこかしこにさりげなく披露されるこうした分析、証明技術には大きな示唆があると強調しておきたい。

ほろ酔いで店を出た後も、振り返ってその建物の全体像を確認する。もちろん、「看板」という情報も見落としてはならない。商店街や飲食街のフィールドワークでは、目につきやすい1階部分だけでなく、2階から上を観察して初めて得られる情報が重要、と評者も学生時代に教えられたことを思い出す。現在の酒場に至る時空間履歴を辿れば、そこが湯屋から酒場へ衣替えし、隣接した食堂の一部を加えた後、2階部分は別の店として切り離されたことがわかる。空間を「足して割って」作られたと説明されるこの部分は、平面の地図では到底知りえない複雑な建築空間と立体的な街路の復元に成功している。

評者は常々「表玄関」だけではなく「裏口」や「勝手口」から見た風景を描きたいと思ってきた

が、本書の「裏町」の風景描写には余念がない。そして、明るい昼間と暗い夜間では違った表情を見せるという言葉も忘れてはならない。このように、序章で読者はまず、「酒場内外の観察」、「裏」、「夜」という眼鏡を手に入れる。そして、地図の重ね合わせ、資料の突き合わせ、文学作品の参照、統計の読解などを丹念に組み合わせながら、酒場が「京都学」へと昇華していく過程の全貌を目の当たりにするのである。

第1章「(茶屋酒)の系譜学」では、明治末の京都を舞台に近世の料理茶屋で供されていた「茶屋酒」の系譜を辿る。時代を特定した既往の酒場論はいくつかあるが<sup>2)</sup>、通時的に論じること自体がまず新しい。食べる、飲むということは当然ながら「身体的」な行為である。こうした飲み食いの「身体感覚」、そして酒場に漂う独特の「風情」を何らかの証左を添えて文字で表現するというのは至難の業であるにもかかわらず、ここでは文豪、谷崎潤一郎の体験の巧みな引用によってそれが鮮やかに描かれる。例えば「先斗町の茶屋酒が身に沁み込んだか、二三日頭が重苦しく」、「夕方になるとそはそはして無上に茶屋酒が戀ひしくなる」といった具合に。谷崎の筆による両文にはいずれも「茶屋酒」が登場する。その系譜を近世に遡る際には若き日の本居宣長を案内役に選び、名所図会と照らしながら茶屋の実際の位置や社会的な位置づけにも言及する。それらが淘汰、機能分化して明治の酒場へとつながるといふ議論は次章への呼び水となっている。

第2章「酒場の誕生」の舞台は、大正前期頃から京都に登場してくる気軽な酒場である。そこに集う人びとの話に耳を傾けつつ、消費文化の花開くモダン京都の都市空間を観察する。この時期になると、洋食バーや洋酒レストランなどの西洋料理店が新たな酒場として加わった。学生、教員、小説家たちの記憶に刻まれた喫食の場には、賄いのない貸間と共に発達した食堂やミルクホール、そして喫茶店、カフェーなどがあり、その中からサロンの洋食バーが登場する。カフェーはその後、社会問題として取り締まりの対象にもなり、「風俗営業取り締まり」への布石となった。また、これは歓楽地帯の取り締まりとも連動する「空間的困い込み」の意図があったという指摘などは、この著者をして流石と言わしめる読みどこ

ろである。その議論は次章でさらに展開する。

第3章「洋食酒場と花街」では、京都における西洋料理店の立地展開だけでなく、そこに深く関わってくる花街の存在が浮き彫りにされる。散歩や恋の場として、三校生の消費行動にカフェーが停留点として組み込まれていたという指摘がまず興味深い。次に四条通のカフェーの立地を「京都市明細図」などで辿りながら、東洋亭や菊水館の内部に立ち寄り、洋食屋がカフェーに、そして酒場へと変化していく様子を観察する。明治30年代になると西洋料理屋が増加するが、その主な場所が花街と繁華街周辺であった。「酒場」を追いかける著者は「日本の洋食屋は西洋式おでん屋、もっといってしまえば居酒屋だったのである(111頁)」と、この西洋料理屋の展開の中にもその系譜を見出す。こうした日本の洋食は当時の京都では「色町洋食」とも呼ばれていた。祇園花街の「場の力」が老舗洋食店の立地を促したのだとすれば、それは人文地理学の概念では「立地適応」である、「どの店も祇園にあればいつの間にかそれらしく色がついてしまう」と示唆するあたり、飲み歩き、食べ歩きを嗜む人文地理学者ならではの慧眼が冴える。

第4章「歓楽街の誕生」は、明治・大正・昭和戦前期までを論じていた本書前半に対して、戦後、特に高度経済成長期における花街の変容と飲食店の集積する歓楽街《木屋町》が誕生する地理歴史的な条件を考察している。ここでは第2章で既に伏線が示されていた「風俗営業等取締法」が、各都道府県による解釈の違いによってその運用が一樣ではなかったことが論じられる。そうした地方色の中、ただ1点「カフェー」の規定は共通していた。ここでのカフェーは、バー、サロン、スナック、酒場といった飲食系風俗営業(水商売)の総称であり、その集積が戦後復興・高度経済成長期に進んだ結果、「ネオン街」が誕生した。著者は「職業別電話帳」を手掛かりに、京都における歓楽街の分布と集積を明らかにする。分析の焦点は通称《木屋町》にあてられ、その誕生経緯と景観変化、それに対する人々の認識が詳述される。昭和33(1958)年の売春防止法以後、脱花街化と歓楽街化が同時に進み、花街の主役はお茶屋から水商売へと転換していく。詳しく見れば、こうした変化の様相も《先斗町》と《祇園東》

では対照的でさえある、という指摘も地域の観察として見逃せない。さらに、「京都市明細図」、「火災保険地図」、高瀬川や京都電気鉄道との位置関係と役割を重ね、木屋町通りに面した街区の「表」と「裏」の空間分化を証明したうえで、〈裏町〉の空間性が歓楽街を成立させたことと論じている終盤は非常に読み応えがある。

第5章「《裏寺町》の空間文化誌」は本書の中で、一味ちがう酒場の味わい方を示した章である。場所イメージ、叙景、京都らしさ、語りを切り口に、《裏寺町》の「ぼんや(貸席の一種)」の存在が論じられる。これらを「心理地理学」と言及している点は興味深い。途中、東京の銀座の酒場風景を記述し、縄暖簾から酒場へと転換した江戸の酒場風景が、京都では「正宗ホール」というモダンな名前をまとして、大正期の裏町に登場したと考察される。《裏寺町》は戦後さらに裏町化し、正宗ホールは酒場「静」へと引き継がれたという。このあたりのくだりを読むと、著者はこの「静」のカウンターでお酒を味わいながら本書の構想を練り上げたのではないかと思えてくる。おそらく読者も、この界限で独酌して、大正京都の残照を眺めつつこの本を味わい直してみたいのではないか。かく言う私もその一人である。

終章では、京都における〈会館〉という酒場の意味が論じられる。本当はそこにあるのに、無意識の中で見えないものになっている、しかし実はその地域を象徴するような景観、空間を発見していく論理展開がこの章の魅力である。著者はそれをこれまで論じてきた「裏」ではなく「奥」、「奥ゆき」として見立て、新たな都市空間の論じ方を提案する。路地という現実空間のありよう、路地文学に描かれた生活世界との共通性から、京都で独特の展開を遂げた「会館」を都市空間の分割パターン的一种とする解釈は、アクロバティックでありながら腑に落ちる。〈会館〉を通して、スクラップ&ビルドによらない空間用途変更の可能性を提示したことは、未来につながる歴史分析でもある。最後に〈会館〉へ読者を案内しつつ、都市の無意識が息づいている〈会館〉こそは、歓楽街の縮図だと問いかけて本書は閉じられる。

以下、評として、近世から現代までの京都の酒場の時空をめぐる旅を通して得た知見と本書の意義を述べておきたい。本書の最大の魅力はなんと

いっても臨場感の中で深められる思索の鮮やかさだろう。読者は酒場を歩く著者と共に暖簾をくぐり、ほろ酔い顔で建物のファザードや看板を見上げるその傍らに立って町の歴史を知る極意に触れることができる。かといって、簡易な街歩きの案内書にとどまる内容ではなく、むしろ「開かれた学術書」として評価されるべき一冊という印象を受けた。巧みな筆致によるところもあろうが、それ以上に、観察や描写に都市史研究者ならではの手腕と工夫が光るからだろう。それは細部まで一貫しており、それゆえに、各章の各節いずれの情報も見逃せないのである。さらには、「酒場」と「飲食」というこれまでの学術研究ではあまり取り上げられてこなかったテーマを「学」の俎上に乗せたことも、本書の大きな成果だといえる。

正宗ホールを例に東京と京都の酒場の系譜関係が紹介されたが、著者が既に論じている大阪や神戸との関係はどうだったのだろう。比較都市史を酒場から再構築する展開が期待される。本書で示された都市の空間形成と酒場との関係は、日本はもちろん海外にフィールドを広げてさらに追究できるテーマであることは間違いない<sup>9)</sup>。そして、都市に生きる人びとにとって、酒場や食堂といった喫食の場はどのような機能を持っていたのだろうか。本書から示唆を得て、今まさにコロナ禍で苦境に立たされている飲食業界、とりわけ歓楽街を構成する数多の酒場が醸してきた「風情」や「場の力」の意味をあらためて考えてみる必要があると気づかされた。これは本書の課題というだけでなく、評者自身も考えてみたいテーマである。

(湯澤規子)

#### 【注】

- 1) 加藤政洋編『モダン京都〈遊楽〉の空間文化誌』ナカニシヤ出版、2017、同『花街—異空間の都市史』朝日新聞社、2005、同『大阪のスラムと盛り場—近代都市と場所の系譜学』創元社、2002ほか。
- 2) 近世は飯野亮一『居酒屋の誕生—江戸の呑みだおれ文化』ちくま学芸文庫、2014、戦後は橋本健二『居酒屋の戦後史』祥伝社新書、2015、現代はマイク・モラスキー『日本の居酒屋文化—赤提灯の魅力を探る』光文社新

- 書, 2014などがある。
- 3) 下田淳『居酒屋の世界史』講談社現代新書,  
2011, マーク・ジェイン, ジル・バレンタイ  
ン, サラ・L・ホロウェイ著, 杉山和明・二

村太郎・荒又美陽・成瀬厚訳『アルコールと  
酔っぱらいの地理学—秩序ある／なき空間を  
読み解く』明石書店, 2019。